

平成15年1月30日

## 都城北諸文化情報誌

# おてんじょだけ

※「おてんじょだけ」とは、<sup>たかちほのみね</sup>高千穂峰のことをいい、「御天上嶽」と書きます。むか<sup>みやこのじょうぼんちない</sup>しから都城盆地内に住んできた私たちの祖先はこの山を「父なる山」と崇め、こ<sup>あが</sup>う呼んできたのです。

## 第3号

### 都北社会教育協会文化振興部会

都城市教育委員会文化課・三股町教育委員会生涯学習課・山之口町教育委員会社会教育課  
高城町教育委員会社会教育課・山田町教育委員会社会教育課・高崎町教育委員会社会教育課

### 1 第3号の発刊にあたって

前号でのアンケートにつき、皆様からさまざまなご意見をいただきました。賛同してくださる意見が多く、今後の作成への大きな励みとなりました。これからも情報を発信して参りますので、よろしくお願いいたします。

さて、今回は第3号をお届けいたします。本号では「田の神」を取り上げてみました。田の神は「田の神さあー」といわれ、人々に親しまれてきたものです。稲の豊作を祈る、そしてみんなの健康・安全を祈る対象とされてきました。えびの市がとても有名ですが、これらは江戸時代につくられたもので、旧薩摩藩領内にしか残されていない、南九州独特のもので、そして、いろいろな形をしています。今回は都北地域に残る代表的な田の神を掲載いたしました。

ご不明な点やわかりにくいことなどは、お気軽に最寄の教育委員会へお問い合わせください。

### 2 文化情報トピックスー田の神ー

<sup>のうか</sup>農家のくらしにとって米づくりはだいじなものでした。だから稲の<sup>ほうさく</sup>豊作をもたらすという田の神さまを深く信じ、だいじに<sup>まつ</sup>祀ったのです。「春になると山の神は里において田の神となり、秋には山へ帰って山の神になる」と言われています。

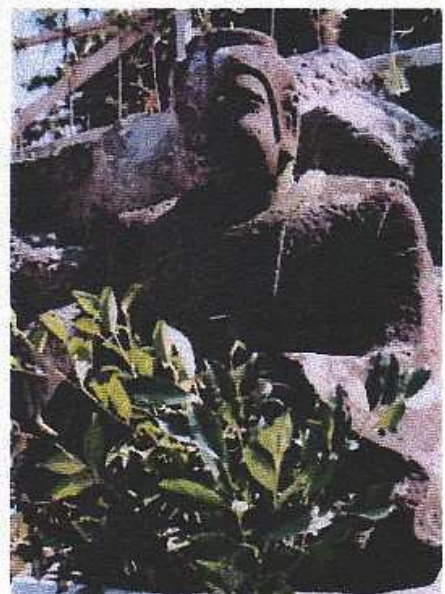
都城北諸地方のタノカンサアは、シキ（敷）をかぶり、シャモジ<sup>ちやわん</sup>と茶碗を持った形が多く見られます。旧薩摩藩以外では見られないようですが、これは<sup>のうみん</sup>農民型といわれており、ここでは一番多いタイプで、地域独特のものと言えるでしょう。このほかには神官の<sup>しんかん</sup>かっこうをした神官型や、僧侶型<sup>そうりよ</sup>などといったものがあります。

神官による祭りごとはほとんどなく、集落の人々がほんの少しお供えをして<sup>まつ</sup>祀るだけです。汚しても<sup>よご</sup>転がしても<sup>ころ</sup>たたらない庶民の神とされ、盗まれて他の所へ行っても不平を言わず、行った先々で人々を守ってくれるのです。村の若者たちが他の<sup>しゅうらく</sup>集落からこっそり盗んでくることもよくありました。むかしは3年たったら返すのがしきたりでした。返すときは盛大に送っていったといわれています。

岩満の田の神さま

#### ①岩満の田の神（都城市岩満町）

<sup>いわみつ</sup>岩満公民館に祀られているこの田の神様は「田の神田」と山林





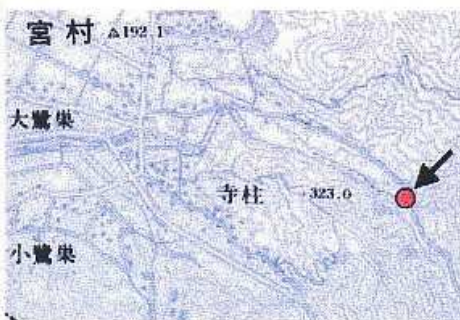
を持っています。神様をまつる集落の人々がタノカン祭りのお金をつくるために設けたものです。そして山林の仕事で出たお金をもとに、金貸しの活動（田の神講）をしていました。むかしから人々がお互いを助け合って生活をしてきたことを物語っています。大正5～10年ごろ当時、この神様は他のところにオットラテイタ（盗まれていた）ので、近くの別のところからぬすんでくることにして、「ナワネコ（縄ない講）」のドンチャン騒ぎのときにオットッタのです。しばらくはかくしておいて、のちに今のところにおかれることになりました。

### ②坊ヶ野の田の神像（三股町）

三股町大字宮村にある田の神さまです。下の地図がその場

所です。

「坊ヶ野整備事業記念碑」のかたわらに建っています。この神さまの背中には、「豊年万作」（作物がいっぱい取れて、豊かな年になりますように）を願った文字が刻まれています。



坊ヶ野田の神さまとその場所



### ③山之口の田の神さま



下富吉地区の田の神さま

退治や病気にかかったときの薬がわりに田の神さまをけずりとした跡のあるのも特徴です。江戸時代終わりごろの文字や年号がきざんであるものもあります。町内では13ヶ所で確認されており、だいたい小字・大字ごとに一体おかれています。写真の田の神さまは、山之口町役場から国道269号線を都城へ2.5kmほどいった下富吉地区にあります。

南むきの田んぼを見わたせる山すそとか田んぼのほとりにすえてあります。なかには石や木製のほこらをつくってすえてあるものもあります。町内では、神官型というタイプがほとんどです。「田の神を新しくつくと、その地区のわかいむすめが一人死ぬ」という言いつたえがあり、そのためによそのものをぬすんでくるということもありました。また、作物をあらす虫の



高城町穂満坊の田の神さま

### ④高城町の田の神さま

高城町では全部で18体が見つかっています。神官の形が14、農民の形が4です。写真は穂満坊地区にあるもので、頭にシキ（敷）をかぶり、右手にめしげ、左手におわんをもつ農民の型です。



### ⑤山田町の田の神さま

山田町は昔（江戸時代）は薩摩藩さつまはんとしまづいって島津氏の殿様の領地でした。田の神さまは、お米がいっぱいとれるように、また、台風たいふうや日照りひでなどから田んぼを守ってくれるようにと願ってまつ祀られ、田んぼを一目で見わたせるところにおかれまして。古江ふるえにある田の神さまには背中に、1854年に二才（若いひとたち・青年たちのことです）がたてたということをしめす文字がきざまれています。

ところで、町内でお化粧けしやうをする田の神さまは古江ふるえのものだけです。また、着物をきているのは、県内でもここだけのようです。もともとは、毎年春や秋に祭りをするときにお化粧けしやうをしていたようです。

山田町内で田の神さまは、10数体残っています。



山田町の田の神さま

### ⑥高崎町の田の神さま（大字前田字谷川）

この神さまは、旧国道221号線沿い、外達神社の入口こしにあります。神官の衣装しんかん いしやうを着て、頭には烏帽子えぼしをかぶり、腰こしにかけています。壊れているところはほとんどありません。高



田之神

さ85センチほど、幅80センチほどの大きさです。背中には、享保9年（1734）にかわのちよげんぼうかわのちよげんぼうという人が毛利七衛門もろりしちえもんという人につくらせたことがきざまれています。そのころは霧島山の噴火が多く、人間の力ではどうしようもないことを神さまにお祈りしたのかもしれない。この形の神さまとしては県内で2番目に古いものです。昔は



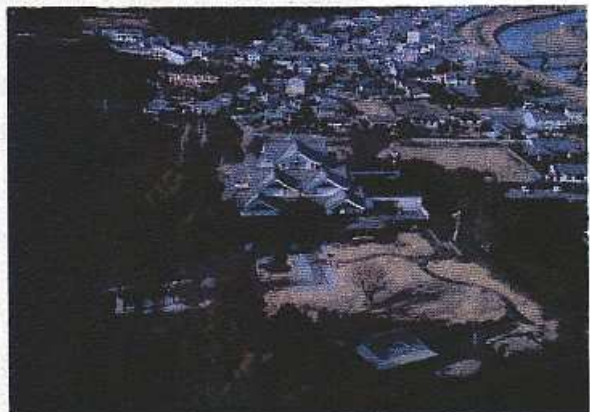
高崎町の田の神さま

季節ごとにお祭りをしていましたが、今は公民館が7月20日にお祭りをしています。

## 3 イベントコーナー

### ★ 都城歴史資料館が展示入れかえをしました！

みやこのじょうししみやこじまちやしろやまこうえんない  
都城市都島町城山公園内にある  
みやこのじょうししみやこじまちやしろやまこうえんない  
都城歴史資料館では、展示品の大がかりな入れかえをしました。むかし都城の殿さまだった  
みやこのじょうしまつげ  
都城島津家に伝わる貴重な品々を入れかえ、中2階の展示コーナーでは発掘で出てきた土器などを時代順にならべなおしました。都城島津家の品々で





の今回の目玉は「高麗虎狩図屏風（こうらいとらがりずびょうぶ）」という大きな屏風絵です。豊臣秀吉が朝鮮を侵略したとき、島津家も一緒に行っていますが、そのときに豊臣秀吉の命令に従って虎狩をしたことを題材にして、江戸時代の中頃にえがかれたものです。また、中2階は時代順にしてありますので分かりやすくなっています。毎週土曜日は小中学生無料となっていますので、ぜひみなさん見に来てください！

入館料 大人210円 中高校生150円 小学生100円

9時30分～17時(入館は16:30まで)

都城歴史資料館0986-25-8011・都城市文化課0986-23-9547

### ★都城市史が出ました！

都城市では市制70周年記念事業として、都城市史を出しています。第5回目の今回は、史料編の近世2と近現代3の2冊が出されました。近世2は江戸時代に都城島津家がつくった「庄内地理志」を活字にしたもので、近現代3は、明治の新聞「宮崎新報」にかかっている都城に関する記事をぬき出したものです。どちらも都城の歴史を明らかにするだいじな情報です。図書館にありますので、見てください。もし興味がおありでしたら、下のところで販売していますので、連絡ください。

都城市立図書館市史編さん係 0986-23-2116



## 4 コラム「にせどんたつの軒先話」

にせ②「こんまえは、おまえはまた話を聞かんうちからはちたねー。」

にせ①「そいでよ、あいからまた走いったらよ、御池に着いたはよかどん、御池は池じゃがよ。火山灰が、ん？黄色いボラがなんやち？さっばいわからんかったど。」

にせ②「じゃって、おいの話を最後まで聞けち、このまえも言うたがよ。ほんのこちー、ひんだるっどねー。ま、よかが。そしたらね、も、今日はねー、ちごこついかすっでねー。今ねー、都城ではねー、わっぜーかおもっしいー発掘をしちよっこがあったっど。」

にせ①「なんちー、そいはいったいどこなー、はよ、いっかせっくいやんせー。もすぐにでんいこたっど。」

にせ②「ま、ちったおちついておいの話を聞かんか。あんねー、都城市の横市ではねー、今年も発掘調査をしちよつたっどん、よかもんがでちよちいう話やが。」

にせ①「そ、そ、そいは何ちいう遺跡で、いつごろんものやっとな？」

にせ②「そこはねー、2つあっせえねー、加治屋遺跡ちいうのと、星原遺跡ちいうものやっど。加治屋遺跡からはねー、今から700年ぐらいまえの建物がどっさい見つかっせえー、1,000年ばっかい前の建物あとや弥生時代の建物のあと、縄文時代の料理をしたあとなんかがあったちいうこっちやっど。そいでな、星原遺跡ではな、平安時代の道路や畑のあと、古墳時代の住居あとなんか見つかっちよちいうことやっど。」

にせ①「んにゃ、そいはまたずんばい見つかつたもんじゃ。ほいでよ、いまはどひこばっかいけ済んじよつたろかい？」

にせ②「もだいぶけ済んじよちいう話やが。」

にせ①「んにゃ、も、じゃれば、こいから行たっくっでなー。ほいならなー。」

にせ②「今日もまたはちっしもたー。ま、また何かあっときは聞きにくっじゃろ。」

※にせー「二オ」をこうよみ、若い人のことをさす。

### 【標準語訳】

にせ②「この前は、あなたはまた話を聞かないうちに行ってしまったね。」



